

68 『頓医抄』における脈法

吉岡 広 記

えて重要な資料であるが、いまだ詳論したものを見ない。よって、当時の脈法の一部を明らかにすべく、『頓医抄』における脈法を検討する。

『頓医抄』五十巻は、鎌倉時代中期～南北朝時代初期（二二六五～一三三七）の僧医・梶原性全が編纂した日本中世における大型の医学全書である。成書年は正安四（嘉元二年（一三〇二～〇四）で、疾病分類は『諸病源候論』に拠るも、処方は『太平聖恵方』を主要な引用書としている。この時期、医療の担い手が公卿から僧あるいは民間に移行したこともあつて、一般に普及するため和文で書かれているのが特徴である。また、それまでの医書では節略されることの多かった脈論が取り上げられており、注目に値する。この時期の脈診に関する資料は、本書のほか、性全第二の医学全書『万安方』（一三一三～二七）や、惟宗具俊の医学随筆『医談抄』（成書年未詳、惟宗時俊の『医家千字文註』（一二九三）などにも見られる。これらの資料は、鎌倉時代における脈法の実情を知ろう

『頓医抄』におけるまともな脈法の記載は、巻四十一の察脈全要・諸病死生脈の二篇に見られ、更に前者を十項目（項目前に序論あり実質十一項目）に、後者を二十九項目に分けている。全四十項目（序論を含む）を通覧すると、引用書は『察病指南』、『三因極一病証方論』（以下『三因方』と略す）、『太平聖恵方』、『脈経』（宋版）の新渡来の宋代医書四書目であり、『察病指南』が二十五項目、『太平聖恵方』が六項目、『三因方』が五項目、『脈経』が四項目確認された（『脈経』が引用される項目は『太平聖恵方』と同様であり、なおかつ同文であるので、いずれからの引用かは断定できない。ただ引用回数之差から考えれば『脈経』は用いられていないと考えられる）。また、筆者の調査で引用不明項目が七項目あった。前記の通り本文は和文であり、その記述をつぶさに見ていくと、渡来医書の引用に際しては、表現の改変や内容の添削により、一層理解しやすい文章となつていくことが分かる。また、引用不明

項目があることから考えれば、性全が渡来医書を自分なりに咀嚼し、独自の脈学を持っていたという可能性が示唆される。

次に具体的な脈法を見ていくことにする。引用の約六割を占める『察病指南』は、脈状分類を七表八裏九道脈、主な脈診法を左右寸関尺診（寸関尺診、寸口診もある）におく脈書である。当然、『頓医抄』においても同様の脈状分類がなされているが、脈診法は寸口診であり、左右寸関尺診は排除されている。その明確な理由は不明であるが、おそらくは引用した他の二書（『脈経』を除く）の脈法に起因すると思われる。七表八裏九道脈は、宋代における主要な脈状分類であり、『太平聖恵方』、『三因方』も同様である。しかし、脈診法は『太平聖恵方』が寸関尺診、寸口診、『三因方』が寸関尺診、寸口診、人迎氣口診という立場を取っており、言い換えれば、多くの記述が寸口診、寸関尺診に関するものばかりである。このような事情から、『察病指南』における左右寸関尺診に関する記述を削除したのではないかと考えられる。とはいえ、『頓医抄』における脈法は、『察病指南』に拠っているといつて

も過言ではないであろう。また、引用書が宋刊本であるという事実は、医学典範が唐鈔卷子本から宋刊本に移行していたことを明確に示しているといえよう。

以上を総括すると、『頓医抄』における脈法は、脈診法は寸口診、脈状分類は七表八裏九道脈という立場をとり、『察病指南』を中心に記述の八割以上を宋代医書の引用に拠っている。一部に性全独自の見解が見られるにせよ、未だ宋代脈法の模倣的段階にあると言えるであろう。

（日本鍼灸研究会）